

序論

序

論文の目的と方法

論文の構成と既往研究

序

建築の良質性

我々は今日まで、膨大な量の建築を経験してきた。中には、歴史に名を残し、今日でもなお輝きと教訓を失わないものもいくつかある。これら歴史化され得た建築がなぜそうなり得たかといえば、それはおそらく、その建築がはらむ問題設定と、それに対する解がその時点で歴史上最も高度なレベルで合致していたものであったか、その問題設定が歴史上はじめてのものだったからだろう。高度な問題解決か、初出の問題提起である。それらはそれまで誰も表現し得なかった問題や解を表現しており、“新しい”という言葉で形容されることが多い。

だが、歴史に残りやすいこうした建築の新しさと、建築の“良質さ”との乖離はあるまいか。これが今回の論文の出発点であり、新しさという観点では語られ得ない良質さを何とか具体的に提示できないか、というのが本論文のモチベーションである。注意しなければ気がつかないが、良質さによって歴史化される建築はもっと存在するはずではないか。

しかしながら、良質さという基準は文字通りあいまいで、共通解を見つけることはほぼ不可能であると言い切っている。だがそれでも、ある一定以上の人々が良質だと感じる、ある程度一般的な解はあり得ると信じる。なぜなら、そうした一般性を伴った良質な表現の存在を信じることは、他者に向けた思考と表現の可能性を信じることと同義であるからである。

私の興味はつまるところ、判断の難しいこの良質さにある。新しさはより進歩した未来を漠然と信じていることによるものであるが、私の第一の興味は新しさにはなく、むしろ良質さにあるのである。新しさは、その良質さの結果で構わない。この2つはほとんど別の原理によるものなのではないか、という直感的疑問の中で、良質性を担う原理とは何か、ということ、とある計画を通して考えてみることにした。

蓋然性について

建築の良質さに関わる問題を、ささやかにジャンバッティスタ・ヴィーコ (Giambattista Vico, 1668-1744) の力を借りて補足しておきたい。

ヴィーコは、人間に関わる真理 (verum) は蓋然性¹のなかにこそ見いだせるとした。蓋然的なもの、科学や合理論でわりきれないものこそが、まさに人間の行為の結果としての事実 (factum) として真理の基礎におかれるとしたのである。さらに、人間は考えることはできるが、神のように認識²することはできず、科学はこの欠陥のために生まれたものとした。彼はやがて人間の具体的経験に真理の根拠を求めた「新しい科学」を提唱する。この「新しい科学」においては、人間の蓋然的で不確実な具体的経験の結果こそが事実であり、真理のもとなのである。

ヴィーコを思想を知ったのはごく最近であるが、ヴィーコのこうした思想を知ったとき、私はこの世界観に驚くというよりは、やはりこう考えていた人間がいた

1
蓋然性、真実らしきもの verisimilia

ヴィーコによれば「蓋然性は真実と虚偽との中間に存在する」ものである。(前之園幸一郎「ジャンバッティスタ・ヴィーコの Verum と Factum について」『青山学院女子短期大学紀要』Vol.35, pp. 97-113、青山学院女子短期大学、1981)

2
ヴィーコによれば、認識とは「完全なかたちで観念が生まれてくる、対象的事物のすべての要素を結び合わせること」である。(註1に同)

かという変なシンパシーを感じたものである。なぜならば、"いま、そうある建築"の根拠は、人間の関与と建築自身の具体的体験の結果に他ならないからである。ヴィーコの世界観でいえば、人間による創作行為の歴史と、建築の蓋然性すなわち建築の具体的経験の蓄積が、その建築におけるいまの事実の根拠そのものであり、それを左右するものなのである。事実としての建築は、建築家の思考や図面、場所の力のみによるものではないのである。そうした安定的な条件のほかに、ヴィーコがいう蓋然的な条件が不可避なものとして事実を構成しているのである。

私は、建築においてもこれと同様、蓋然性を制御し、蓋然的な諸要素を総合し調和させることによって、建築を真正へと近づけ得ると確信する。ある建築が、この真実性を完全に獲得するという事は、その場において理想的に良質さを獲得するという事と同義であるといえるからだ。そして、事実と真理のもととなるこうした蓋然的なことに建築史の目を向けてみることに、私は創作態度の本質的内容である、創作者の様々な敬意を試考することによって試みたい。

敬意と総合について

私が意図する敬意なるものは、端的に言えば、蓋然的な要素、すなわち、思考 - 実体 - 自律という建築の各プロセス間の関係を制御する意思である。この各プロセス間の矛盾や乖離、放棄、あるいは無関心が、建築をその真正から脱落させる要因なのである。それはまた、建築主体 - 建築家とよぶことにしよう - の、建築と社会に対する態度、あるいは距離感、あるいは配慮であり、敬意はまさに建築の良質さに課程的に深く関わるものなのである。

ここではまず、敬意を制作と生成という2つの建築段階に分けて説明し、その上でさらに、その上部意識ともいえる総合について説明したいと思う。

まず、建築の制作において、敬意は「正確な実現³」を担うといえる。これは、建築家の思考から実体へと至るプロセスにおいて、この両者間の乖離と矛盾を抑制する力である。この矛盾が減少すればするほど、建築の良質さ、そして真正さは向上するといえよう。建築家の精神や理念と実際の建築とが一致している状態が、建築が正確に実現されている理想的状態であるといえる。理念の多様性はあるにしろ、ある建築が良質であることはこの一致性与同義のものではないだろうか。あるいは、この一致性を精度という言葉でいい換えることもできるだろう。もちろん、ここでいう精度は計量的な精度ではなく、建築思考と建築実体との関係における創造的精度のことをいう。この制作段階における建築態度は、具体的には、建築細部や場所、歴史などへ払われる敬意であると換言することができよう。こうした敬意を払うことによって、建築の正確な実現が達成されるのである。

次に、建築の実現後の生成段階（あるいは「学習⁴」段階）において、敬意は建築の自律と実現後の広大な時空に対するものである、ということができよう。建築史は、建築家の思考や実現直後の建築実体には敬意と関心を寄せ、熱心になるが、"いま"のその建築に関しては関心が薄い。建築史はほとんどの場合、いまある建築そのものというよりは、その当初の姿や理念を追いかけるのだ。それはよく建

3
ケネス・フランプトン『テクトニック・カルチャー』松畑強、山本想太郎訳、TOTO出版、2002、638p、p.50（原著：Kenneth Frampton, "Studies in Tectonic Culture, The Poetics of Construction in Nineteenth and Twentieth Century Architecture", edited by John Cava, The MIT Press, 1995）

4
Stewart Brand『How Buildings Learn: What happens after they're built』, Penguin Books, 1994, 243p.

築家の罪だと思われがちであり、時に建築史がこれを批判するが、これは他ならぬ建築史自身の罪ではなかろうか。建築図面ではほとんど表現し得ない、制作後の蓋然的不確定要素とそれに払われる関心。これも建築の良質さに関わる不可欠な要素であり、生成段階における敬意としてここで試考してみたいのである。

敬意について便宜的に2段階に分けて説明をしたが、これらの敬意や建築事実は完全に連続的なものであり、一切の断絶はない。たとえ時空が一定の速さでないにしても、それは断絶とは本質的に異なるのである。そして、そうした連続的な建築のプロセスにおいて、こうした敬意のさらに上部構造があるとすれば、それは建築家の総合意思である。敬意が単発な、突発的なものであるならば、その建築はほんのわずかばかり真正に近づくに過ぎない。建築が真に真正に近づくためには、これらの敬意を総合する哲学的意思の存在が必然なのである。これは、"賢慮⁵"とも換言できるものである。

5

賢慮について詳しくは本論 2.3 で述べる。

制作段階において、思考と実体を一致させるために様々な建築要素に払う敬意。また、生成段階において、建築の自律と、それを包み込み解放する時空に払う敬意。そしてこれらの不可分で連続する敬意の総合意思。これらが、いまある建築的事実、つまり"建築がいまそうある"最大の理由であり、建築の良質さを司る根源力なのである。それは新しさとは異なる、建築史がより目を向けるべきところなのではないだろうか。



以上、「序」と題して、私の本論文における興味と基本的背景を拙いながらも示した。

本論文における興味の出発点は建築の良質性であり、その良質性の原理を具体的に記述せんことを最も基本の動機としている。そして基本的にそれは建築の蓋然性、すなわちプロセスを制御する敬意によってもたらされると考える。さらにそれらの敬意は、制作と生成という、一切不可分なく連続するそれぞれの建築段階において様々に表されるものといえるだろう。さらにそれらの上部構造といえる、主体の哲学的な思惟が、それらの発現を総合するのである。蓋然のプロセスにおけるこれらの意思によって、建築の真正さ、すなわち良質性が真に獲得されるのである。

論文の目的と方法

論文の目的

アルヴァロ・シザ (Alvaro Siza Vieira, 1933-) とロベルト・コロヴァ (Roberto Collova, 1943-) による、1968年ベリーチェ (Belice) 地震後におけるイタリア・シチリア島サレミ市の一連の計画 (以下、サレミ計画) における、敬意とその総合についての論考を行う。特に大聖堂 (Chiesa Madre) とそれに隣接するアリチア

広場 (Piazza Alicia) における彼らがいう「最小態度 (Minimal Acts⁶)」を念頭におき、蓋然性と良質さを担う建築家による豊かな敬意がみられる一例として整理・提示することを本研究の主たる目的とする。

6

『LOTUS INTERNATIONAL』106、
Rizzoli International、2000、
pp104-109

私とサレミ計画との出会いは、直感的であった。それは大学4年時の卒業計画制作期間中であった。ふと手にした雑誌『a+u』の「特集：再生と変容」と題された号⁷の一番最後に掲載されていた、この計画の詩的な写真と静寂な図面に目を奪われたのである。この建築の何とも言葉にできない良質さが、私の感覚の芯を気持ちよく通り抜けた。この良質さを具体的な言葉で記述できたならば、どれだけすばらしいだろうと思ったものである。

7

『a+u』347、1999

大地震によっていったん崩れ、瓦礫と化した大聖堂のまったく無名なこの再生計画は、シザやコロヴァの様々な作品を知った今でも傑作の一つであると思う。この計画において、彼らは建築家の姿を消し、建築家があたかも何も創造しない存在であるかのように振る舞い、かつ創造しているといえよう。建築家の現れるところと現れないところ、あるいは部分と全体、瓦礫と創造部分といった相反要素が、高度にバランスされているのだ。こうした、建築家の誠実な態度が滲出した各要素を、いくつか具体的に分けて考察し、あわよくば建築にかかわらず、広範な創造行為における人間の優れた創造態度の一例として紹介したい。

サレミ計画にみられるこの高度なバランス感覚と良質さは、建築家の誠実な建築態度なしには保ち得ない。そしてそうした態度の本質こそが敬意である。サレミ計画を対象に選定したのは、私にとってその良質さが注目すべきものであるからだ。この論文において、わずかでも私にしかできない建築史を正確に記述できんことを願う。

論文の方法

本論文は大きく2つの資料に基づいて構成されている。1つは、2007年9月12日-28日に筆者が行った現地調査で得た資料、および設計者の1人であるコロヴァへの2時間にわたるインタビューである。これらはいわば第一次的資料として、この計画における創造態度をみるに最も信頼性の高い資料である。

もう1つは、サレミ計画を扱った国内外の雑誌および本論文における各項に関する各種文献である。直感的な本論文の発起点を、これらの資料によって補完し積極的に批判しながら、より客観的なものとすることを目指す。

これら2種の資料を基本として、実際に体感した空間と理念的空間とを並列させた考察をし、また体験した空間と様々な建築論や建築との比較も行いながら、サレミ計画における敬意と総合意思の特性、そして良質たるゆえんを明らかにする。

論文の構成と既往研究

ここでは、本論の各章節に関してその基本的内容と既往研究、そして本論において批判すべき点を簡単に示す。

1.1 概要

現地調査の成果（図面、写真）や国内外の雑誌におけるサレミ計画の記事を取り上げ、計画当初の状況と現況とを報告する。

現在掲載が確認できている国内外の雑誌資料は

- Pierre Alain Croset 「Salemi e il suo territorio」⁸ 8
『Casabella』 536、1987
- Alvaro Siza Vieira 「THE RECONSTRUCTION OF THE CHIESA-MADRE CHURCH IN SALEMI, SICILY」⁹ 9
『ARCHITECTURE D AUJOURD HUI』 278、1991、p117
- Francois Burkhardt 「Ricostruzione della Chiesa Madre e ridisegno della Piazza Alicia e delle strade adiacenti a Salemi」¹⁰ 10
『Domus』 813、1999
- Alvaro Siza Vieira, Roberto Collova 「The rebuilding of the Cathedral and Piazza-Alicia, Salemi, Sicily, Italy 1982 ongoing」¹¹ 11
『a+u』 347、1999、pp.92-123
- Alvaro Siza Vieira, Roberto Collova 「Minimal Acts in the Historic Fabric, Salemi, 1991-98 (projects)」¹² 12

の5誌である。

またサレミ市誌も入手しており、それらも活用してこの計画の要点を整理してゆく。

1.2 コローヴァ氏インタビュー

現地調査の際に設計者のコローヴァ氏に行ったインタビュー全文である。またここでは、インタビューに表れる彼の意図を上記の各種資料を用いながら補足していく。

2.1 できごとへ

2.1 では、ヨーロッパ・特にイタリアにおけるレスタウロ *restauro*：保存修復論の観点からサレミ計画を考察する。

サレミ計画のもともとの契機であるベリーチェ地震が1968年、そして計画案のもととなったワークショップが1981年前後であり、計画の実現開始が1982年頃である¹³ことを考えると、1980年代初頭当時の保存修復観をここで再考すべきであろう。サレミ計画を論じるならば、サレミ計画の時間とリアルタイムな状況において論じる必要があるからである。

保存修復論史に関わる主要な文献としては、

13
大聖堂周辺以外の街路など、プロジェクトの一部分の実行開始が1982年ごろだったことはインタビューによる。また註8『Casabella』536の発行は1987年であるが、この時点で主要な計画はほぼ策定されていたことが文章と図面からわかるが、実際の写真は掲載されていない。サレミ計画の大聖堂周辺が実際に動き出したのは、1991年頃であったことが、参考文献から推測される。事実、大聖堂の計画実現後の写真が掲載されているのは1999年以降の参考文献のみである。

14
鹿島出版会、1978.11.248p

15
法政大学出版局、1988.11

- ・陣内秀信『イタリア都市再生の論理』¹⁴
- ・陣内秀信『都市を読む・イタリア』¹⁵
- ・「イタリアの歴史的遺産の蘇生術 (建築と都市空間の保存と再生 <特集>)」¹⁶
- ・ウゴミズコ「戦後イタリアにおける歴史的建造物の保存修復論」¹⁷

16
『SD』229、pp.22-37、鹿島出版
会、1983.10

17
日本建築学会大会学術講演梗概集
(関東)、pp.119-120、日本建築
学会、2006.9

などがあげられる。これらは共通して、イタリアを中心として特に近代以降のヨーロッパにおける歴史的建造物の保存修復論史を扱ったものであり、法制的な背景や建築会議による建築憲章に関連するものである。

これらに比べて特徴的で、都市単体を扱ったものが

- ・宮脇勝「イタリアの都市開発に関する研究1 - シチリア州ジベリーナ市の震災復興を中心に -」¹⁸

18
日本建築学会大会学術講演梗概集
(北海道)、pp.429-430、日本建
築学会、1995.8

である。このジベリーナ市はサレミ市の隣町であり、地震によってサレミ市よりも大きな被害を被ったといわれている街である¹⁹。宮脇はジベリーナ市の震災復興に関して幾度かの現地調査を経た研究をされている。ただしジベリーナ市とサレミ市との震災復興のやり方は非常に対照的といえるものである。またこの研究の成果をより一般に向けて発表したものが

19
ibid.8

- ・宮脇勝「芸術都市への再生」²⁰

20
『SD』361、鹿島出版会、
1994.10

である。

2.1 ではまず、これらを用いて保存修復理論史におけるサレミ計画の位置づけを考察する。

次に、その位置づけをみた上で、1970年代後半に確立されていった保存修復理論として、建築類型学からサレミ計画の意味を探る。

さらに2.1の後半では「隠喩的修復」と題し、大地震という悲劇と、サレミ市民の歴史との間で生まれた、その隠喩的修復表現について考察する。この隠喩的修復は、列柱や石畳の処理にみることができるが、それらにはできごとや歴史に対するいかなる敬意をみることができるか。

2.2 細部へ

サレミ計画にはまた、建築の細部:detailsに払われている敬意も厚いものがある。これまでも、細部に関連した建築的論考は数多く行われてきたが、サレミ計画における細部への敬意を試考するにあたっては、特にケネス・フランプトンとカルロ・スカルパの思惟にその拠を求めたい。

フランプトンに関していえば、主たる既往研究は

- ・ケネス・フランプトン『テクトニック・カルチャー』²¹
- ・岡田哲史「批判的地域主義からテクトニック・カルチャーまで」²²

21
松畑強+山本想太郎訳、TOTO出
版、2002.1、638p
原著は、Kenneth Frampton
"Studies in Tectonic Culture,
The Poetics of Construction
in Nineteenth and Twentieth
Century Architecture", The MIT
Press, 1995, 430p

22
『建築雑誌』1396、日本建築学会、
1996.10

があげられよう。ちなみに、彼の思索は世界中の広範な建築の参照と深い洞察
力によるものであるが、その中にはスカルパも含まれている。

またスカルパに関するものは、

- ・齊藤裕『建築の詩人カルロ・スカルパ』²³
- ・「カルロ・スカルパ特集」²⁴

23

TOTO 出版、1997.7、261p

24

『SD』153、鹿島出版会、
1977.06

が国内では代表的なものである。この他論文も数本確認できており、また早稲
田大学古谷誠章研究室でもスカルパ研究は盛んであるが、その傾向は空間構成の
色が強く、そのディテールに具体的に迫るものはなかなか少ない。

そうした中で本論文のねらいとしたいのは、スカルパの隠れた傑作といわれる
シチリア島パレルモのアバテリス宮修復計画（現パラッツォ・アバテリス美術館）
である。これは本論文のための海外調査において筆者が実際に訪れたものであり、
作品としても、細部への敬意という点できわめて相応しい試考対象であるといえ
る。

この2.2では、まず、フランプトンのいうテクトニックなるものと建築の真正
であることについての論考を行う。彼のテクトニックなる言葉には単に構築点と
しての" 結構 " という意味以上に託された使命があるのだが、そうしたテクトニッ
クなる観点からサレミ計画のディテールを考える。その射程は単に構築的な概念
を超えたものであるが、そうした結構と、建築の真正すなわち良質さとの関係を
考察する。

そして2.2の後半では、こうした結構と真正との関係をふまえ、サレミ計画に
おける手すりとランプに関して考察をする。特にそこには、フランプトンの結構
に対する建築家の決して少なからぬ敬意がみてとれる。そしてこの手すりやラン
プには、建築家が託した鼓動や脈を感じることができると同時に、その普遍的な
形態に内在する結構的生命もあった。それらについて、「脈と普遍性」と題し、サ
レミ計画において結構に託された意味と結構に払われた敬意を考える。

2.3 静謐へ

2.3ではまず「総合と賢慮」と題し、2.1と2.2で述べる、サレミ計画にみられ
る様々な敬意に対し、それらを総合する哲学的意思について考察する。そして次
に「静かなる建築」と題し、建築が内包し、建築が放たれる時間と静謐さに関し
て考察する。

25

前田忠直訳、鹿島出版会、
1992.10、244p

26

鹿島出版会、1994.3、212p

サレミ計画に限らずとも、建築における総合あるいは総合の問題はこれまで多
く論じられてきた。その中でも私は以下を主要な文献として参照したい。

27

王国社、2003.10、222p

- ・『ルイス・カーン建築論集』²⁵
- ・前田忠直『ルイス・カーン研究』²⁶
- ・香山壽夫『ルイス・カーンとはだれか』²⁷
- ・入江正之『アントニオ・ガウディ論』²⁸
- ・入江正之『美学者ミラ・イ・フォンタナルスの思想について』²⁹

28

早稲田大学出版部、1985、377p

29

日本建築学会大会学術講演梗概集
(九州)、2007.8、pp.549-550

特にカーンのフォームに関する思惟とそれに関する前田の論考は非常に有効に関連づけられるだろう。入江のガウディに関する一連の研究には、ガウディの総合という問題にも深い思惟がみられる。またミラはアントニオ・ガウディの思想に影響を与えたとされる人物であるが、入江によれば彼のいう"賢慮"なる概念はガウディの"総合"の源泉だった。この総合と賢慮なる概念と敬意の総合との重なりを考察することによって、敬意の総合という意識構造を明らかにしたい。

また2.3の後半「静かなる建築」においては、サレミ計画の全体性、すなわち印象について考察をする。その印象は端的に言えば大地と表裏一体の静謐である。この静謐の根源を、サレミ計画が内包するある特殊な時間について考察することで明らかにしたい。というのも、その特殊な時間とは、次のようなものであるからだ。サレミ計画は、1982年にその計画案がほぼ固まったものの、さまざまな条件の変化や行政との折衝上の停滞などがあり、資料によればその実現化期間は1991年にまで下ってからである。さらに、最終的に計画通りの姿になったのは1990年末、雑誌資料によれば1999年頃になってからであった。さらに広場ではいまだに工事が行われており、竣工していないということさえできる。こうした、現代建築としては非常に特殊な時間を内包しているが故か、サレミ計画の印象は極めて安定的で、静謐で、まるで大地と一体のようなものであった。前半部分で扱う総合意思とも関連させながら、建築することと時間についてここで考察する。静謐と時間に関して参考にしたいのが、先にもあげたカーンとルイス・バラガンの建築論である。

・ Emilio Ambasz 『The architecture of Luis Barragán』³⁰

バラガンの「静謐さを表現できない建築は何であれ、精神的なものを持ち得ていない³¹」ということばは、彼が参考対象として十分に妥当であることを示しているだろう。

2.3で扱うこうした時間的問題では、「序」でも述べたような生成に関する敬意との関連を見逃してはならないだろう。2.3においては、生成段階での敬意と、総合とが主な主題である。

30
Museum of Modern Art, 1976,
128p.

31
原文は「All architecture which does not express serenity fails in its spiritual mission.」で、これは Clive Bamford Smith "Builders in the Sun", New York Architecture Book Publishing Company, 1967, 224p, p.54 での引用である。

本論を通して

本論を通しては、建築の制作段階、すなわち建築が思考から実体へと至る段階における建築と敬意との関係は、2.2において深く関わりをもちながら考察される。それは、建築するということがどういうことかという、これまですべての建築家が問うてきたであろう問いに、はかなくも、サレミ計画を通して私が挑戦する試みでもある。

次に、建築の生成段階、すなわち建築の実体が現れて以後の広大な時間における段階での敬意が、主に2.3において考察されている。その主題は、シザとコロヴァアが、サレミ計画の"建設"の先に、いかなる"建築"をみていたか、というこ

とになろう。これはまた、先の制作という行為と並んで建築家を感懐せ続けている問いである。

2.3 ではまた、賢慮と総合の問題を、上記の制作と生成における敬意と関連して述べられている。サレミ計画における賢慮は、いかなる敬意の帰結としてそこに発現しているか。われわれが学ぶべきところは、どういったプロセスにあるか。それは何かを乗り越えてはいるか。建築の本質に迫る試みである。

以上のような構成により本論は記述される。この試みは、拡散しがちなこの種の議論において、たった1つをその論考における基本的対象と設定することによって、まさに試考とよべる、出来る限りの具体性を備えた論文を目指すものである。ここで掲げられる建築史は、残念ながら一般的なで社会的な類のものを旨とした試みでは全くない。歴史はどこまでも解釈であり、その愕然とさせられる多様性の中で、わずかにもがいた汗の一滴として、私の建築に対する精神的文学の一文として、こうして記しておくまでである。